

最後の時計

作 : 岡崎道成

演出 : 小川政弘

登場人物

トマス

リヒター公爵

カール

召使いハンス

シュッツ夫人

メイド

ヨハン

アンナ

ナレーター

< 前編 >

トマス 「ああ、できた。神様、とうとう最後の時計ができました。ありがとうございます。」

N トマスは、たった今出来上がった時計を満足そうに眺めながら、神様に感謝の祈りを捧げました。トマスは、それは腕のいい時計職人でした。年はもう60を過ぎていましたが、彼の作る時計は、ねじが長持ちすることで評判でしたし、注文する人の希望に応じて、どんな形の時計でも作りました。特にトマスが得意だったのは、人形が扉から出て動くようなカラクリ時計で、その動きの巧妙さは、見る人をいつまでも飽きさせることはありませんでした。それで、街の人々はもちろん、王様や貴族たちからも、トマスの所に注文が来るのでした。しかしそんなトマスも、去年妻を亡くしてからはすっかり年を取ってしまい、精密な時計作りに疲れを感じるようになっていました。そんなある夜、トマスが眠っていると、まぶしい光がトマスを照らしました。そして、天から声が聞こえてきたのです。

天の声 「トマス、トマス」

トマス 「は、はい、ここにあります。」

天の声 「クリスマスまでに、時計を一つ作りなさい。そしてその時計を、『一番豊

かなクリスマス』を祝っている人に贈りなさい。その時計が、お前の作る最後の時計となる。」

トマス 「はい、おっしゃる通りにいたします。」

- 朝。トマス目覚める。

トマス 「・・・夢か。あれは、神様の声だったのだろうか。『一番豊かなクリスマス』？ 一体何のことだろう・・・。ああ、それより、さっそく時計を作らねば。」

N その日からトマスは、注文を受けるのをぱったりとやめ、夢のお告げの通りに時計を作り始めました。もちろんカラクリ時計です。秋が過ぎ、冬になって雪がちらつき始めても、トマスは一心に時計を作り続けました。そうして3ヶ月が過ぎ、クリスマスの2日前の今日、トマスの最後の時計は出来上がったのでした。時計の扉の中には、飼い葉桶に寝ておられる赤子のイエス様や、3人の博士、羊飼いたちがのった舞台がしまわれていました。王様に差し上げても恥ずかしくない出来映えです。

トマス 「これなら、きっと受け取った人も喜んでくれるに違いない。」

N まだ見ぬその人の喜ぶ顔を思い描いていると、トマスのこれまでの苦労も消えていくようでした。

トマス 「それはそうと、これを一体誰に贈ればいいのか？クリスマスには、誰もが豊かで楽しい気持ちになってお祝いをする。その中から、どうやって『一番豊かなクリスマス』を祝う人を探せばいいのだろう。」

N トマスは、はやる気持ちを抑え、しばらく腕組みをして考えました。

トマス 「そうだ、リヒター公爵様のお屋敷に行こう。わしの時計を気に入っていつも注文を下さっていたし、あの方なら、さぞりっぱなクリスマスのお祝いをするに違いない。」

N 出来上がったばかりの時計を箱に入れて抱えながら、トマスはリヒター公爵の屋敷に向かいました。屋敷はクリスマスツリーやきれいなキャンドルで飾られ、すっかり準備が整っているようでした。

公爵 「トマス、久しぶりではないか。近頃ぜんぜん顔を出さぬから、どうしたか

とっていたのだ。どうだ、また一つ時計を頼まれてくれぬか。」

トマス 「閣下、お言葉は大変うれしいのですが、私はもう年を取りすぎて、時計を作れなくなりました。それで、これまでごひいきに下さった御礼に伺ったというわけで。」

公爵 「何、時計作りをやめてしまうのか。そうか、それは残念だのう。お前のように腕のいい時計職人は2人といない。陛下も、さぞ残念がるであろう。」

トマス 「もったいないお言葉で。」

N その時、広間の入口の扉が開いたかと思うと、小さな男の子が駆け込んできました。

カール 「やだやだ、あんなのやだ！」

ハンス 「ぼっちゃん！ いけません、カールぼっちゃん！」

N 召使が、後から慌てて追って来ました。

公爵 「何だハンス、騒がしい。」

ハンス 「旦那様、申し訳ありません。バルト伯爵様からクリスマスの贈り物に届いたマントが、カールぼっちゃんのお気に召さないようで・・・」

カール 「だってあんなかっこ悪いマント、着たくないよ、ぼく。」

公爵 「バルトからだって。どれ、見せなさい。うん、何だこれは。本当に趣味の悪い模様だな。カール、こんなもの着なくてよい。・・・とんだ所を見せたな、トマス。毎年クリスマスともなると、諸侯たちは互いに贈り物をして、そのセンスの良さを競い合うのだ。お前たち街の者もそうであろう。」

トマス 「さあ、私などはクリスマスというと、聖書を呼んで祈りを捧げることしか思いつきませんで、贈り物などそう度々は・・・」

公爵 「わっはっは、つつましいのう。せっかくの年1度のクリスマスだ、皆で贈り物を交換して、楽しむとよい。ほれ、3人の博士もキリストに贈り物をしたではないか。」

トマス 「は、はあ・・・」

N トマスは考えました。

トマス 「クリスマスは贈り物をする日、か。ふむ、確かに贈り物を交換すれば豊かな気持ちになれる。だがあの様子では、公爵様もぼっちゃんも、決して豊かな気持ちにはなっていないのではないかな。『一番豊かなクリスマス』とは

違うような気がするな。」

N トマスは、持ってきた時計の箱を抱えて、とぼとぼと家に帰りました。次の日、トマスは時計を持ってシュッツ夫人の家に向かいました。シュッツ夫人は未亡人でしたが、その裕福な財産を惜しげもなく貧しい人に施したり、困っている人を助けたりしていました。

トマス 「あの心優しいシュッツ夫人なら、きっと『一番豊かなクリスマス』をお祝いするに違いない。」

N シュッツ夫人の家は、いつものようにたくさんの人が集まって、賑やかな様子です。中で音楽の練習をしているのか、楽器の音も聴こえていました。

夫人 「まあ、トマス、しばらく。どうしてたの？元気でした？」

トマス 「奥様、実は私、時計作りをもうやめようと思ひまして、そのご挨拶に参りました。」

夫人 「あらまあ、時計作りをおやめになるって、どうして。」

トマス 「ええ、近頃目めっきり疲れを感じるようになりまして。よる年並には勝てません。」

夫人 「そうなの。あなたがルーペをかけて時計を作る姿、もう見られなくなるのね。寂しいわ。おやめになったら、ここにもちよくちよく遊びに来てくださいね。気のいい方たちがたくさんいますよ。あ、トマス、明日のクリスマスも是非ここにいらっしゃいよ。みなさんで一緒にお祝いしましょ。」

トマス 「それはそれは、ありがとうございます。」

N トマスが感激して、時計の箱に手をかけた時です。この家のメイドがやって来て言いました。

メイド 「奥様、お肉屋さんへ行って来ましたが、七面鳥が売り切れです。どういたしましょう。」

夫人 「何ですって、売り切れ？他の店も探したの？」

メイド 「もちろんです、奥様。町のお肉屋さん全部探しました。でももう一羽も残ってないんです。」

トマス 「あの、奥様。別に七面鳥がなくても、いいではありませんか。」

夫人 「だめよだめよ。テーブルの真ん中に七面鳥の皿がないなんて。ああ、何てことでしょう。」

N その様子を見ながら、トマスは考えました。

トマス 「シュッツ夫人は、どんな人でも分け隔てなく親切になさる。確かにみんなで楽しい時を過ごせば、豊かな気持ちになれる。だがあの様子では、シュッツ夫人は、決して豊かな気持ちにはなっていないのではないかな。『一番豊かなクリスマス』とは違うような気がするな。」

N トマスは、時計の箱を持ったまま、とぼとぼと家に帰り着きました。体がどっと疲れていました。

トマス 「神様、『一番豊かなクリスマス』を祝う人を探しましたが、昨日も今日も、私にはわかりませんでした。明日はもうクリスマスです。一体誰に時計を贈ればいいのですか。教えて下さい・・・」

N 祈りながら、いつしかトマスは眠りに落ちていきました。

< 後編 >

N 年老いた時計職人のトマスは、夢の中で神様から最後の時計を作るようにお告げを受けました。そしてその時計を、『一番豊かなクリスマス』を祝う人に贈りなさい、と言われたのでした。トマスは、クリスマスの朝早く目覚めると、ベッドから飛び起きました。今日中に、時計を贈る人を探さなければなりません。彼はさっそく腕組みをして考えました。

トマス 「一体どこへ行けば、『一番豊かなクリスマス』を祝う人に会えるのだろう。」

N そのときです。家の外から中を伺っている人がいることに、彼は気付きました。

トマス 「何か、うちに御用ですか。」

ヨハン 「あの、こちら時計職人のトマスさんの家でしょうか。」

トマス 「ええ、そうですが。でももう・・・」

ヨハン 「ああ、よかった。私の懐中時計が動かなくなってしまって、いくらネジを巻いてもダメなんです。」

トマス 「それはお困りでしょう。ちょっと見てみましょうか。」
ヨハン 「すみません。」
トマス 「ああ、雪が降ってきましたね。あなたもお入りなさい。」

N トマスは仕事場に入ると、その人から懐中時計を受け取り、中を調べ始めました。その人も、心配そうに横から覗き込んでいます。

トマス 「大丈夫、すぐ直りますよ。」

N トマスは、しばらくネジを締めたり、油を注したりした後、裏蓋を注意深く閉じ、彼に時計を返しました。

ヨハン 「ああ、動いてる。ありがとうございます。おいくらになりますか。」
トマス 「いえ、いいですよ。」
ヨハン 「え？でも、修理代を。」
トマス 「いや、実は、私は2日前に時計職人をやめたんです。だから、今のは仕事じゃありませんから、お代はいりません。」

ヨハン 「でも、こんな朝早くに時計を直していただいたのに、それでは申し訳ありません。ぜひ御礼をさせて下さい。あの、失礼ですが、御家族は。」
トマス 「去年妻が亡くなって、今一人で暮らしています。」
ヨハン 「では、お寂しいでしょう。今晚うちにいらしてください。御一緒にクリスマスを祝いましょう。私はヨハンと言います。川の向こうの3本杉の横が私の家です。お待ちしておりますよ。」

N トマスは迷いました。今日中に時計を贈る人を探さなければならないのです。

トマス 「あの懐中時計は、外国製の、なかなか立派なものだった。さぞ裕福な家なのだろう。彼の家に行く前に時計を贈る人が見つければいいが。」

N トマスは、時計の入った箱を抱えて、思いつく限りの場所に行きました。どの人もクリスマスを楽しんでいるように見えました。でもどの人を見ても、トマスには『一番豊かなクリスマス』とは違うように思えました。朝から降り続いた雪も、だいぶ積もっています。一日中歩き回ったトマスの体は、すっかり冷え切っていました。彼は、まだ持ち主の決まらない時計の箱を抱えて、とぼとぼと川向こうの家に向かいました。もうすっかり暗くなっています。川を渡り、3本杉の近くまで来て、トマスは辺りを見回しました。

トマス 「確か3本杉の横と言っていたはずだが、はて、どこにもそれらしい屋敷などないぞ。・・・うん？あれは・・・」

N 暗やみの中に、小さな明かりが見えました。目を凝らしてみると、どうやら木こり小屋のようです。

トマス 「ああ、木こりがいるのだな。あそこで聞いてみよう。」

トマス 「あの、すみませんが、この辺にヨハンさんという人のお屋敷が・・・」
ヨハン 「ああ、いらっしゃい、お待ちしてたんですよ。遅いから迎えに行こうかと思ってたところです。さ、どうぞお入り下さい。」

N 驚いたことに、木こり小屋にいたのはそのヨハンでした。

トマス 「ヨハンさん、ここがあなたの家でしたか。」

ヨハン 「ええ、ここで妻と暮らしてます。妻のアンナです。」

アンナ 「今朝は主人の時計を直して下さって、ありがとうございました。あんな朝早くだったので心配していたんですが、親切な方でよかったって、2人で話してたんですよ。」

トマス 「いや、なかなかいい時計だったので、てっきりどこかのお屋敷の人かと思いましたよ。」

ヨハン 「あれは、私の父の形見なのです。父は昔商売をされていて。」

アンナ 「さあさ、寒かったですでしょう。クリスマスと言っても七面鳥も何もありませんが、温かいスープはたっぷりありますからね。」

トマス 「おお、ありがたい。外を歩いてすっかり冷えてしまったから、温かいものが一番ですよ。」

N 部屋の真ん中には、小さなテーブルが置かれていました。テーブルの上に木でできた燭台があり、ロウソクの火が静かに揺れています。アンナが、湯気の立ったスープと、パンをテーブルに並べました。

ヨハン 「トマスさん、もしよろしければ、食事の前に聖書を朗読していただけますか。いつもは私が読んでいるのですが、今日はせっかくあなたがいらしてるので。」

トマス 「私に聖書を？ええ、ええ、喜んで。では、クリスマスにちなんだ箇所を。」

N トマスは、ヨハンから聖書を受け取ると、イザヤという預言者の言葉を読み始めました。

トマス 「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」(イザヤ9)

N トマスが聖書を読み終わると、しばらくの静寂がおとずれました。3人とも、今の聖書の言葉を噛みしめているようでした。ヨハンが祈り始めました。

ヨハン 「神様、今日は、あなたが愛する一人子、イエス様を私たちに下さったクリスマスです。あなたはイエス様を私たちの代わりに十字架にかけて、私たちの罪を赦し、神様の子として下さいました。感謝します。また、今日はトマスさんと私たちを会わせてくださって、一緒にクリスマスを祝えますことも、ありがとうございます。あなたが永遠に褒め称えられますように。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン」

アンナ 「アーメン」

トマス 「アーメン。」

N 3人は顔を上げました。

トマス 「ところであなたたちは、街の人たちのように贈り物を交換しないのですか。」

ヨハン 「ええ、御覧のように貧しい暮らしですから。でも、イエス様こそ、神様から私たちへの贈り物です。こんなに高価な贈り物は、他にありません。」

トマス 「では、街の人たちと賑やかに過ごしたりもしないのですか。」

アンナ 「私たちの救い主が、小さな馬小屋でお生まれになったことに思いを馳せるには、このように静かな方がいいでしょう？」

N それを聞いてトマスは大きくなずきました。

トマス (モノ)「ここだ。この家だ。」

N トマスは、あの時計の入った箱を2人に差し出しました。

アンナ 「これは・・・？」

トマス 「これは、私が作った最後の時計です。これを贈る人を探していたんです。」

N トマスが、箱の中からは時計を取り出しました。

アンナ 「まあ、なんて素敵な時計・・・」

トマス 「実は、これは、神様から夢でお告げを受けて作ったものなんですが・・・」

N そう言ってトマスは、夢のことから、時計を贈るために『一番豊かなクリスマス』を祝う人をあちこち探し回ったことまで、すっかり2人に話しました。

ヨハン 「それで、これを私たちに？」

トマス 「ええ。『一番豊かなクリスマス』に必要なものは、高価な贈り物でも、素晴らしいごちそうでもありませんでした。ただあなたたちのように、神様の約束されたイエス様を、受け取っていることだったんです。」

N トマスは、時計のネジを巻き、時間を合わせました。

アンナ 「この扉の中には、何が入っているのですか。」

トマス 「もうすぐわかりますよ。さ、それまで、あなたたちがイエス様と出会ったときの話でも聞かせて下さい。」

N そうしてトマスは、やさしい微笑みを浮かべながら、2人の話を聞いていました。

- ひと時が過ぎて。時計の扉がかちゃんと音を立てる。

アンナ 「あら、扉が開くわ。」

N 扉の中から、飼い葉桶に寝ておられるイエス様や羊飼い、3人の博士たちの人形が出てきて、ゆっくりと回り始めました。

『ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私た

ちに与えられる』。

神様は、この聖書の約束を実現して下さいました。小さな人形と共に、神様への讃美と感謝が、3人の心の中を繰り返し、繰り返しめぐっていました。さあ、今年もあなたも、トマスたちと一緒に、『一番豊かなクリスマス』を、お祝いしてみませんか。

< 完 >